

旅行の世界史

人類はどのように旅してきたのか

森 貴史

人類の歴史は 旅の歴史

アレクサンドロス大王、
コロンブス、イーロン・マスクの
スペースXまで、

である！

「旅行」から人類史を
捉え直す野心作！

旅行の世界史

人類はどのように旅をしてきたのか

森貴史

星海社

244



SEIKAISHA
SHINSHO

序

「保証してもいいですが、旅をしない人間は、少なくとも芸術と学問に携わる人びと
ならなおさら、なんとも哀れなものです！」「……」平凡な才能の人間は、旅に出て
も出なくても、ずっと平凡なままです。しかし、優れた才能の持ち主は、「……」ず
っと同一の場所にいると、だめになってしまいます」

（父レオポルト宛て1778年9月11日付書簡）

35年間の生涯で17度の旅を経験し、その人生の3分の1ほどが旅の途上にあつたオー
ストリア出身の作曲家ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756・91）のことばで
ある。

イタリア、ドイツ、フランス、イギリス、オランダ、ベルギー、チェコ、スロヴァキア、

スイスへと旅したかれは、いわば旅の達人だった。

モーツアルトはたしかに音楽家として天才であったが、凡才の人びとであっても、旅に出て、非日常を体験すると、成長することもある。旅で成長するのは、天賦^{てんぷ}の才をもった人だけではないはずだ。

人間が移動するということは、「空間」を移動することを意味する。それが旅である。旅とは知らない土地をおとずれて、経験として知ることである。

すなわち、旅とは「未知」を体験し、それを「既知」とする経験である。

そして、旅をすると、その新鮮な体験を書き残したくなるものである。それゆえ、旅人と旅行記は、古代から不可分の関係にあった。旅行記を読むことで、著者の旅行を追体験できるからである。

必然的に、旅人について語ることは、その旅行記の内容を語ることもある。くわえて、旅から帰ってきた著者の体験記は、さらに読者を旅へといざなうのだ。

このような旅と人間をめぐる文化一般についての歴史を、本書『旅行の世界史 人類はどのように旅をしてきたのか』は紹介するものである。

旅の歴史をたどることは、人間とその取りまく環境を考えることでもある。移動するこ

とで、人間は新しい環境に置かれるからだ。

たとえば、それは見たこともない自然である。人間と自然の関係は、現代とはまったく異なっていた。後述するが、自然とは、かつては眺めて感受する対象ではなかった。不吉や恐怖の感情、辛い労働をもたらすもので、けっして楽しむべき「風景」ではなかった。にもかかわらず、人間は太古の時代から見知らぬ土地に憧れて、未知なる空間に想いをはせてきたのだ。これゆえに、旅行の新しい目的が考え出され、旅行手段が発明されてきた。

そして、旅行の移動距離や到達した場所が想定外に遠大であつたばあい、旅行者は「冒険者」と呼ばれたのである。

本書では、西ヨーロッパを中心に、できるだけ広範に、旅行の目的や手段の変遷についても言及していきたい。それによって、いかにして人類がみずからの移動距離の限界を超えてきたのかという問いの答えとともに、逆に移動時間の短縮をはかってきた過程も知ることができるからである。

有史以前から人類が移動してきた痕跡は、古代の神話や伝説の英雄たちから知ることが

できるだろう。古代ギリシアのアレクサンドロス大王は地中海世界からインドまで遠征して、帰路で客死したが、あるいは玄奘^{げんじょう}三蔵のように、仏教を学ぶ目的で中国からインドにおよぶ遠大な旅に出発し、無事に帰還した人物もいた。

中世の時代、さまざまな身分や職業の人びとと同様に、信仰者たちは聖地への巡礼を盛んにおこなった。巡礼者が聖地をおとずれることで巡礼地周辺の経済をうるおしたのは、現代と同様である。

同時代には、ヨーロッパ世界やオリエントからインドや中国まで旅した「冒険者」が存在し、かれらの幻想的な内容の旅行記は西洋人の想像力を刺激した。一方で、北欧のヴァイキングや航海者たちは、植民地や交易地を求めて、未知なる海へと船出した。知られざる海域や航路を探す旅は、アメリカ大陸発見後も、つぎの近代での南太平洋諸島の発見、現代での南極圏および北極圏の踏破へとつづいていく。

近代において、地球上に存在する人類未踏の領域に足を踏みこんだのは、啓蒙主義の洗礼を受けた学者たちが最初だった。それ以前は恐怖の対象だった自然が近代以降、計測・記録されるべき研究対象になったのだ。

とりわけ近代になると、旅行の歴史は、新しいテクノロジーの開発と普及が新しい旅行

ビジネスの開拓を牽引してきたことの歴史でもある。

18世紀に愛用されていた馬車、帆船につづいて、新しく蒸気機関が発明されると、19世紀には蒸気機関車や蒸気船が発明されて、新しい交通手段として普及が進んだ。

この変化に着目して、パイオニアたちは大衆的な団体旅行を企画したり、旅の快適化をビジネスに発展させた豪華列車や豪華客船の旅を考案し、世界一周旅行まで実現したのである。新しい交通手段の発展は同時に、実用的な旅行ガイドブックの出版ブームも後押しした。

くわえて、19世紀後半のガソリンエンジンの開発は四輪自動車、オートバイ、飛行機、飛行船を実用化させて、20世紀前期には空の旅での世界一周もおこなわれるようになった。

第2次世界大戦後の航空機の発達によって、大型旅客機が普及した結果、旅行時間を短縮するなお一層の快適さを大空の旅にもたらした。さらに21世紀、テクノロジーの発展は宇宙船や有人ロケットの実用化を促進して、ついには宇宙旅行ビジネスを企画させるにいたるのである。

かくして、社会的・技術的制約の解消によって旅行は進歩してきたわけだが、一方で移

動手段と目的地がきわめて限定されていた時代であっても、異世界への旅を、人間は想像してきた。たとえば月への旅は、すでに古代の物語に記されている。

アッシリアの風刺作家ルキアノス（120?または125?・180?）の短編『本当の話』では、未知の海域へと船出した50人の若者の船がつむじ風で7日7晩も飛ばされたあげく、月世界にたどりつき、エンデュミオン王の軍に加勢して、太陽王パエトーンと戦う。

SFの父と呼ばれるフランスの作家ジュール・ヴェルヌ（1828・1905）の長編小説2部作『月世界旅行』（1865、70年）発表にさきがけること、1700年まえのことである。

すでに天文学者ヨハネス・ケプラー（1571・1630）の『夢』^{ソムニウム}（1634年）では、月世界旅行が夢のなかでおこなわれるし、イギリスの司教ジョン・ウィルキンズ（1614・72）はその『新世界発見』（1638年）で、月へ到達する4つの手段として、精霊、天使、鳥の力、自身の体に直接結わえつけた翼である空飛ぶ車^{チャリオット}を提案した。

その3つ目の手段を用いて、すなわち月からやってきたという多数の白鳥を捕まえ、ブランコのような座席を取りつけて、主人公ゴンザレスが月をめざした物語が、おなじくイギリスの司教フランシス・ゴドウィン（1562・1633）の『月の男』（1638年）なのだった。そして、ヴェルヌから2000年ほど以前の17世紀のフランスの作家シラノ・ド・ベルジ

ユラック(1619・55)は、『日月両世界旅行記』(1657・62年)を著している。かれは劇作家
エドモン・ロスタン(1868・1918)の戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』(1897年)の
主人公として知られる。シラノ2部作の主人公は月と太陽というふたつの異世界へと旅す
るのだが、太陽に暖められた夜露をつめたビンを腰に巻いたり、6連の火薬を爆発させ
たり、あるいは太陽の光を反射する透明な20面体の集光鏡の力を借りるのだ。

時間旅行の物語に関しても、ヴェルヌと並ぶSFの巨匠H・G・ウェルズ(1866・194
0)の『タイム・マシン』(1895年)が発表される120年以上まえに存在している。

フランスの文筆家ルイ・セバスチャン・メルシエ(1740・1814)は『紀元2440年』
(1771年)で未来都市パリの見聞記を描いてみせた。フランス革命以前のパリの風俗を活写
した『タブロー・ド・パリ』(1781・88)で知られるメルシエの時間旅行は、いわゆる「夢
落ち」で終わる物語であつたけれども。

非日常の異世界に憧れて旅立つ物語は、ユートピア旅行記というジャンルのなかに、幾
多の時代に存在していた。それらの主人公(あるいは著者)はさまざまな手段を発明して、
未知なる世界へと飛び出したのだった。

はるか古代から存在しない旅を夢想するくらいなのだから、人類と旅は不可分なものといつてよいだろうし、本論で紹介するように、古代から現代まで人びとはさまざまな旅をくり広げてきた。

それでは、人間が旅することの歴史をたどる旅に出かけよう！

目次

序 3

第

1

章

古代

英雄は旅で成長する

19

新人の地球への拡大 23 / ギルガメシュ王が残した人類最古の旅の記録 24

オデュッセウスの故郷への旅 28 / アレクサンドロス大王の東征 33

三蔵法師の天竺行 39 / 古代の「観光名所」、世界の七不思議 45

中世

世界を旅する職業人たち

49

旅は病原体も運ぶ

53

1 巡礼者たち

55

巡礼の起源

55 / 聖地を求めて

57 / 巡礼に旅立つ者たち

59

旅の苦難

61 / 巡礼の徴と記念

63 / 遍歴職人は修業の旅に出る

66

放浪芸人と遍歴学生

68 / デューラーのネーデルラント旅行

72

『ジプシー』と呼ばれた人びと

79

2 冒険者たち

83

マルコ・ポーロの謎

84 / 異本『東方見聞録』

88

メッカ巡礼とイブン・バットウータ

92

第

3

章

近代

自然は美しい

馬車、世界探検、アルプス登山、団体旅行

111

1 理性と産業革命の時代

115

まだ知られざる世界へ 115 / 啓蒙主義時代の学術的な旅 119

2 馬車の時代

123

交通機関としての馬車 123 / 馬車旅行のじっさい 126

ヴァイキングの北アメリカ大陸発見 98

コロンブスの大西洋航海と新大陸発見 100

海路の発見とつながる大陸 105 / 自然は美しい 109

3 旅の風景 129

フランス式庭園とイギリス式庭園 129

ピクチャレスクとクロード・グラス 131

4 高等教育としてのグランドツアー 134

大学よりも体験旅行 134／イタリアまでのルート 136

イタリアにて 139／旅のあとに 142

5 トマス・クックがプロデュースする観光旅行 143

団体旅行の意義 143／トマス・クックの団体旅行 146

スコットランドツアー 148／万国博覧会の時代 152

団体旅行で世界一周 161

6 伝説の南方大陸を探して 163

新しい世界航海の誕生まで 163

キャプテン・クックの世界探検航海 167／ラ・ペルーズの探検航海 172

第

4

章

現代 I

20世紀の新しい 大衆旅行

長距離鉄道、豪華客船、飛行船

199

7 アルピニストの誕生

188

デュモン・デュルヴィルのラ・ペルーズ搜索の旅
自然科学者フンボルトの南米探検 177
182

山と学者とアルピニスト 188 / アルプス登山の「黄金時代」 191

さらなる困難をめざした「銀の時代」 193 / アジアの最高峰への挑戦 195

ロマン主義画家ターナーが描いた近代 196

1 便利な旅行ガイドブックの登場 203

昔の旅行案内 203 / ジョン・マレーの「レッド・ガイド」 209

ドイツの「ベデカー」旅行ガイド 212

2 ガソリンエンジンと自転車旅行の時代 216

「安定の世紀」 216 / ガソリン自動車の登場 218

自転車のツーリング旅行 221

3 長距離鉄道と豪華列車の時代 224

ジョージ・プルマンの寝台車革命 224 / オリエント急行で殺人事件はおこらない 228

ヒジャーズ鉄道とアラビアのロレンス 234 / ロシア帝国を滅ぼしたシベリア鉄道 236

鉄道が利用された戦争犯罪 238

4 豪華客船の夢 240

蒸気船による大西洋横断航路 240 / 豪華客船の旅 244

タイタニック号の悲劇 247 / クルーズ船の遊覧 249

現代Ⅱ

新たなテクノロジーによる
旅と極地探検 253

1 大空の旅 255

飛行機の発明

255

／リンドバーグの大西洋横断飛行

257

旅客機の登場

260

／ツェッペリン飛行船の時代

261

飛行船での世界一周旅行

265

／「ヒンデンブルク号」の悲劇

268

2 南極点と北極点の制覇 274

北東航路の開拓

274

／ナンセンの北極圏漂流

276

ピアリーの北極点到達

277

／19世紀末の南極探検

280

スコットとアムンゼンの南極点到達競争 281

3 現代の旅 288

高速鉄道の普及 288
／宇宙旅行の時代はもうすぐ 291
月周回旅行の実現へ 296

結び 299

跋 304

主要参考文献 308

図版出典一覧 315

A GLOBAL
HISTORY OF
TRAVEL

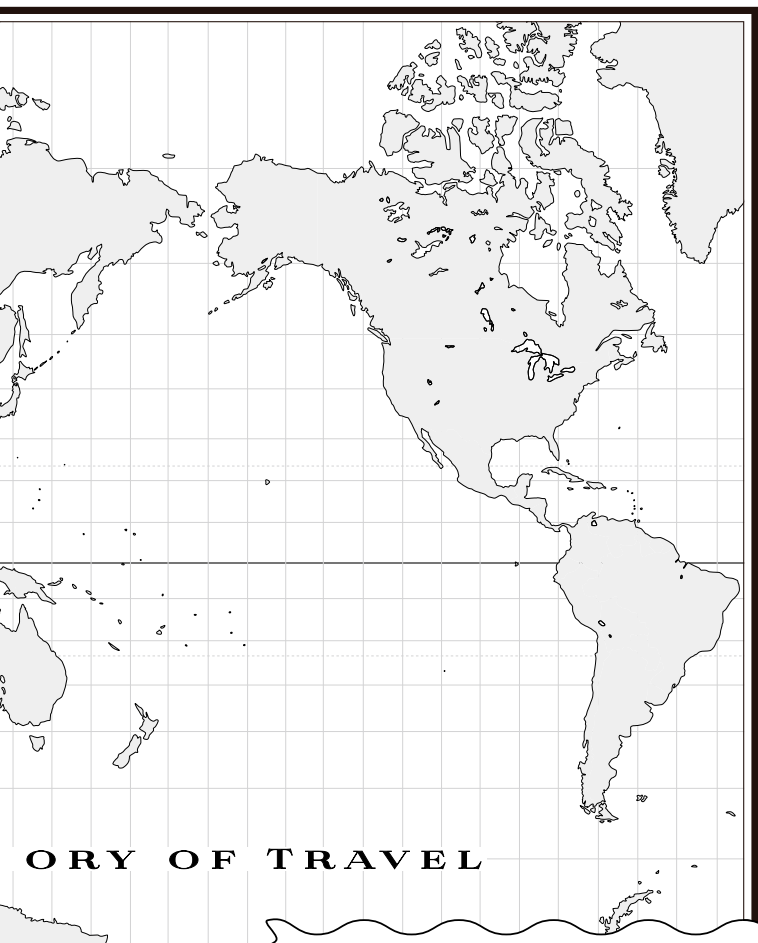
第

1

章

古代

英雄は
旅で成長する



ORY OF TRAVEL

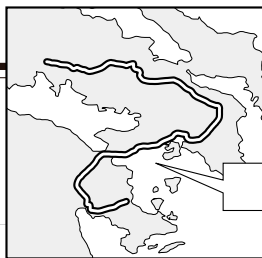
140° 150° 160° 170° 180° 170° 160°

PART

1

ANCIENT PERIOD

HEROES GROW UP ON THE JOURNEY.



オデュッセウス

玄奘三蔵

Xuanzang

アレクサンドロス大王

Alexander the Great

A GLOBAL HIST

0 5000km
1:50000000

30° 20° 10° 0° 10° 20° 30° 40° 50° 60° 70° 80° 90° 100° 110° 120° 130° 140° 150°

われわれ新人（現生人類）は、アフリカから世界各地に旅をして、文明を形成した。先史時代から、人類はつねに移動をくりかえしてきたのだ。

古代においては、神話や伝説のなかに当時の旅のようすをうかがうことができる。現代のわれわれとおなじく、ギルガメシュやオデュッセウスといった伝説や神話上の英雄もまた、旅をして成長したのである。

その一方で、アレクサンドロス大王は実在したマケドニアの王であって、じつさいにギリシア世界からはるばるインドまで想像を絶する戦いの旅をつづけたのだが、旅程に関しては工夫に工夫を重ねた長征だったといえよう。

玄奘三蔵による唐の都長安から天竺^{てんじく}への旅も、小説『西遊記』のモデルとしてよく知られている長大な旅だが、正統な仏典を求めただけでなく、正統な仏教思想を現地で数年間にわたって学んでいる。学僧であつた玄奘にとっては、まさしく「留学」でもあつたのだ。

古代の地中海に存在した「世界の七不思議」はいわば「古代の観光名所」ともいうべきもので、現代人にもなじみ深い観光旅行がおこなわれていたことは、古代にもみいだせるのである。

新人の地球への拡大

われわれ現生人類は「ホモ・サピエンス・サピエンス」という種に分類される。「猿人、原人、旧人、新人」というカテゴリーでは、新人と呼ばれている。

諸説はあるものの、最近ではネアンデルタール人とは別系統とされる新人は、アフリカのサハラ以南に発している。技術を向上させつつも、生存的優位を確立すると、約10万年前にアフリカから中近東へと進出した。さらに北方のヨーロッパへ、中近東からは東方へ、東南アジアから南方のオーストラリア大陸へ、中央アジアから東アジアへ、ついにはシベリアやアラスカを経由して、アメリカ大陸までたどりついた。

狩猟と採取に明け暮れるかれらは、動物、植物、温暖な気候を求めて、旅をしたのだ。競合する人間もおらず、周囲に獲物がみあたらなくなると、新たな土地を求めて、すぐさま移動したのである。

氷河期が終わると、ヨーロッパは森林、河川、湖沼という自然に代表される温暖な環境へと変化した。人びとは草原やツンドラでの狩猟中心の生活を転換せざるをえなくなる。紀元前6000年を経過すると、ギリシアのエーゲ海沿岸や対岸のアナトリア（小アジア）に、土器をもち、栽培する人びとが、すなわち農耕民が現れた。

紀元前5500年ぐらいには、農耕技術はギリシアから北方のバルカン地方へと拡大していった。紀元前4500年から前4000年の時期には、ポーランド、ドイツ、オランダまで農耕が普及し、定住農耕村落が形成されていった。

かくして、人びとは狩猟・採取のために旅をする生活から、定住して農耕をいとなむ生活形態へと変化していった。そして紀元前4000年末ごろに、最古の都市文明と呼ばれるメソポタミア文明が成立するのである。

ギルガメシュ王が残した人類最古の旅の記録

ギリシア語でふたつの河のあいだを意味する「メソポタミア」という語のとおり、ティグリス川とユーフラテス川に挟まれた地域の河口付近で、シュメール人は都市文明を築いた。瀝青れきせいのほかに鉱物資源は産出しなかったものの、2本の河という水源と沖積平野のおかげで、漁業、麦類やナツメヤシの栽培にくわえて、牛、羊、山羊、豚などの家畜を蓄えることができた。その豊かな暮らしによって、シュメール人は都市文明をいとなんだのである。

その文明が生み出した画期的な文化は、粘土板に独特の楔形文字くさびがたで記す記録方法であっ

た。行政と経済について大量の記録が伝わっている。紀元前3000年ごろには、オリエントで最古の高度な文明を築きあげ、王権が成立していた。

シュメール語で書かれた文学とされるもののなかで英雄叙事詩的な性質をもっているのは、ウルク第1王朝の3人の王を描いた物語群であり、もっとも有名なのが5代目の王とされるギルガメシュをめぐる作品である。『ギルガメシュ叙事詩』と呼ばれる物語群は異本も多いが、オリエント世界で人気を博して、アッカド語、アッシリア語、フリ語、ヒッタイト語にも翻訳された。

『ギルガメシュ叙事詩』は、世界最古の文学として断片的な物語が現代に伝わっている。このウルクの王、しかも冒頭では暴君として描かれるギルガメシュの物語には、現代のわれわれにも理解できる旅の要素が記されている(図1-1)。

ギルガメシュは、大地の女神アルルがかれをこらしめるために生み出した猛者エンキドゥと長時間の戦いののちに、友となる。英雄ふたりは遠方にある杉の森へ遠征し、その森番フワワ(フンババとも)を打倒し、杉の木を伐採するために旅立



図 1-1 ギルガメシュ王を描いたとされるレリーフ
(ルーヴル美術館蔵)

つ。ようやく、遠路はるばる杉の森にたどりつく。

彼らは立ち止まり、森を見上げた

杉については、その高さを眺めた

森については、その入口を眺めた

「……」

彼らは杉の山、神の住まい、イルニニ「女神イシュタルの異称」の玉座を見た

山の手前には杉がその頂きをかかっていた

その木陰は快適で、喜びに満ちていた

（矢島文夫訳）

英雄ギルガメシュとエンキドゥは、みごとな杉の森に心をうばわれている。この数行の詩が描いているのは、ふたりが旅の目的地の風景を楽しんでいる場面なのだ。かれらは、現代のわれわれとおなじく、旅先の風景を体験しているといえよう。

『ギルガメシュ叙事詩』には、現代と同様の旅の要素がもうひとつ書かれている。エンキ

ドウ死後に永遠の生命を求めて、ギルガメシュはふたたび旅に出る。「狩人のように私は野原のさなかをさまよった」(同訳)と語るかれが出会うのは、「女主人」と記された(居)酒屋の女将シドゥリである。この時代では酒屋は宿屋も兼業していたゆえに、旅に疲れたギルガメシュは宿で休息しようとしたことになる。

異本のH・ガスター『世界最古の物語』(矢島文夫訳、現代教養文庫、1973年)には、この場面の描写が詳細である。「やがて、どこからみても旅の宿と思われる、一軒の大きな家が目に入りました。ギルガメシュは疲れ切って、痛む足をひきずりながらその家にたどり着き、案内を乞いました」(同訳)と、もっと明確に書かれている。

人類最古の英雄叙事詩で描写されたギルガメシュ王も、旅先の風景を楽しみ、宿で旅の疲れを癒そうとする。人間の旅は、紀元前3000年の時代からかわることがない。そして、人間は旅に出ることで、人生の物語がはじまる。それは古代神話の英雄たちも同様だ。旅立つことで、かれらの伝説は幕が開くのである。

暴君であったギルガメシュは、永遠の命の鍵を知る聖王ウトナピシュティムを訪ねあて、「私はすべての国々をさまよい歩いた／私は険しい山々を超えてきた／私はすべての海を横切った／私の顔面はうまき眠りに満ち足りてはいない／眠らぬためにわが身を苦しめ、手

足を嘆きで満たした」(同訳)と、聖王に吐露する。野蛮な暴君だったギルガメシュは、友のエンキドゥを失うことで命のはかなさを知り、永遠の命を求めて、世界を放浪したのだ。ウトナピシュティムから聞き出した不死の薬草を、ギルガメシュは苦難の末にようやく入手したのもつかの間、水浴中に蛇に喰われてしまう。涙にくれたギルガメシュだが、限りある命をいまは定めと受け入れて、ウルクの町へと帰っていく。

旅することで成長するのは、英雄もかわらない。旅こそが英雄の成長物語に不可欠の要素なのである。

次節では、ヨーロッパ世界で有名なもうひとりの神話の英雄オデュッセウスの旅に眼を向けてみよう。

オデュッセウスの故郷への旅

「オデュッセウスの歌」を意味するタイトルをもつ叙事詩『オデュッセイア』は、盲目の詩人ホメロスによって紀元前8世紀に書かれたもので、古代ギリシア最古期の長編叙事詩である。

主人公オデュッセウスはイオニア海に浮かぶ小島イタカの王だが、かれが遠征に参加し

たトロイア戦争での勝利後に故郷へ帰還するまでの10年間の旅が描かれる。

アナトリア北西部にあった城塞都市トロイアはイリオス、イリオンとも呼ばれており、イリオンを歌う長編叙事詩が『イリアス』であって、おなじくホメロスの作とされている。この物語では、ギリシアとトロイアの10年におよぶ戦争の終末が語られる。

ギリシア兵が内部に潜んだ巨大な木馬を放置し、間者を通じて虚言を信じさせた結果、この木馬をトロイア城壁内へ運びこませることに成功する。そして夜を待つて、ギリシア兵を引き入れて、偽りの戦勝に酔いしれるトロイア勢を奇襲してうち滅ぼしたのである。この奸計を考えだし、みずからも木馬内に隠れて実行したのが、オデュッセウスだった。

トロイア戦争後に故郷へ帰還しようとするかれを描いたのが『オデュッセイア』となる。前半がオデュッセウスの10年間の苦難の旅、後半は帰還後のかれをめぐる物語となっている。

オデュッセウスの故郷への旅はじつに多彩である。海神ポセイドンの逆鱗に触れたかれは、女神カリュプソの島に7年間留め置かれて、女神からの求婚を拒否しつつも故郷を思い、泣き暮らす。手づくりの筏で島を出ると、ポセイドンがまきおこす嵐に悩まされる。難破したオデュッセウスはパイエクス人の島にたどりつく。王と王妃にお目見えしたのち、

宴席が設けられて、楽人デモドコスが呼ばれてくる。トロイア戦争が歌われるのを聴いて、涙を流す主人公の素性が明らかになる。

パイエクス人の島に2日間滞在したオデュッセウスの旅はつづく。ひとつ目巨人キュクロプスの国、魔法を使う女神キルケーの島、冥界、怪物スキュレと魔の淵カリュブデイスと、驚異の旅である。

とりわけ有名なのは、歌声で船乗りを惑わせる、半身が鳥で半身が女性のセイレーンだ。船乗りたちには蠟ろうで耳栓をさせて、オデュッセウス自身は体を帆柱に縛りつけて、歌の魔力をみずから試し聴きするというエピソードである(図1・2)。部下を失い、ふたたびカリュプソの島へ漂着するも、オデュッセウスはそれでも最終的には、パイエクス人の船で故郷の島イタカへ帰還する。

冒頭の序歌で「トロイエ(トロイア)の聖なる城を屠ほふった



図 1・2 ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス《ユリシーズとセイレーンたち》
(1891年、ヴィクトリア国立美術館蔵)、ユリシーズはオデュッセウスの英語形

後、ここかしこと流浪の旅に明け暮れた、かの機略縦横なる男」(松平千秋訳)と紹介される主人公オデュッセウスは、10年間の苦難の旅でなにを学んだのだろうか。

西村賀子『ホメロス『オデュッセイア』へ戦争を後にした英雄の歌』によると、かれが覚醒するのは、パイエクス人の島で楽人デモドコスがトロイア戦争について歌っているのを聴いたときである。

高名の楽人はこう歌ったが、オデュッセウスは打ち萎れて、瞼に溢れる涙は頬を濡らした。そのさまは、己が町己が子らを、無残な敗戦の日に遭わすまいと、祖国と同胞の見守る前で戦って討ち死にした夫にすぎり泣き伏す妻の姿を見るよう、断末魔の苦しみに喘ぐ夫の姿を見るや、その傍らに崩おれてよよと泣く。「……」それに劣らず悲しげに、オデュッセウスは眉の下から涙をこぼした。

(西村賀子訳)

デモドコスの歌はトロイア軍の視点から状況を歌い、敗者の視点からのギリシア軍の暴虐と破壊行為を歌うものだった。みずから考案した木馬の奇計がたまたま成功したもので、

女神アテナの神助あつてのものだったことを、オデュッセウスはデモドコスの歌から看取して泣いたのだった。

これ以降、故郷への旅の途上で覚醒した主人公オデュッセウスは、「非の打ちどころのない名君」、「神の怖れる敬虔^{けいけん}な心を抱き、多くの逞^{たくま}しい民に君臨し、正義を堅持する王」（同訳）の誉れが、理想になったのである。

『オデュッセイア』後半のクライマックスは、オデュッセウス不在の10年間に、その妻ペネロペに求婚していた若者たちとの戦いである。成長をとげたオデュッセウスは最後まで戦いを回避するために説得をつづけたが、かれの声に耳を貸さなかった求婚者たちを討たざるをえなかった。

つづいて、求婚者たちの遺族との戦闘が頂点にさしかかったとき、女神アテナの停戦宣言が告げられる。オデュッセウスが「心嬉しく女神の言葉に随った」（同訳）ところで、『オデュッセイア』の物語は終わるのだった。

すなわち、トロイア戦争で勇名をはせたオデュッセウスは、10年間もの異界をさまよう旅を経て、戦いを好まないよき王へと成長できたのである。

アレクサンドロス大王の東征

旅がもたらした人間的成長をたどれるとはいえ、ギルガメシュ、オデュッセウスは叙事詩の主人公である。それでは、もっとのちの時代に実在した英雄アレクサンドロス大王の旅は、どういうものだっただろうか。しかし、旅とはいえ、オデュッセウスと同様の遠征である。

紀元前356年7月にギリシア北部のマケドニア王国の長男として生まれたアレクサンドロス3世（前356・前323）は32年11ヵ月という短命だった（図1・3）。少年時代の家庭教師が哲学者アリストテレス（前384・前322）であったことはよく知られている。

ギリシアからインドにいたる広大な遠征をなしたげた大王は、その帰還途中に熱病で死去するまでの10年ものあいだ、ずっと東方への旅の空の下にあっ

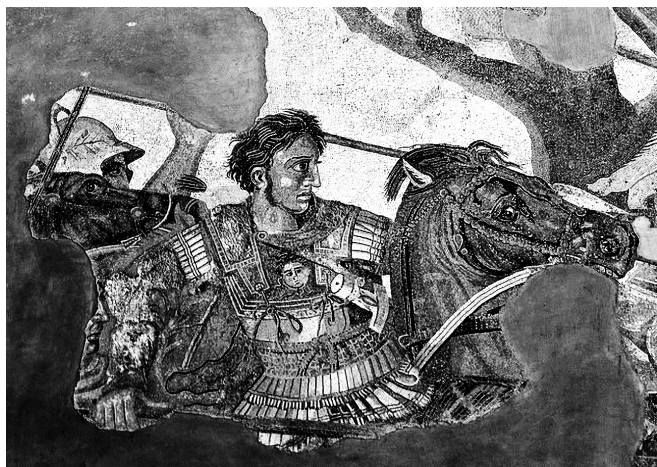


図 1-3 アレクサンドロス大王のモザイク
（ポンペイ出土、ナポリ国立考古学博物館蔵）

た。紀元前334年にマケドニアとギリシアの同盟軍を率いて、ペルシアへむけて遠征を開始した。

アレクサンドロスはアケメネス朝ペルシア帝国の王ダレイオス3世（前380ごろ・前330）を紀元前334年にグラニコスで、翌年にイッソスでうち破り、前331年にはメソポタミアのガウガメラでの決戦でも大勝した。ダレイオス3世は側近に裏切られ、捕虜とされたのちに暗殺されるという結末で、ペルシア帝国との戦いは終了する。

エルブルズ山脈南麓にある都市ヘカトンピュロスで軍を再集結させると、ギリシア同盟軍を中心とした部隊を解散させて、給料や報奨金を支払った。220年つづいたアケメネス朝ペルシア帝国が滅亡し、当初の東征の目的が達成されたからである。

この時点から、アレクサンドロスのほんとうの東征がはじまった。エルブルズ山脈を越えて、カスピ海南岸へと到達、ヒュルカニア平定を皮切りに、東方へと進撃した。だが、およそロマンティシズムはない。バクトリア・ソグディアナ地方では2年間におよぶ殺戮戦争が展開された。都市を陥落させたのちは、男は殺害し、女と子どもは奴隷とした。

紀元前327年秋に、アレクサンドロスの軍勢はインド（現パキスタン）に進攻すると、この地でも抵抗する都市の住民を虐殺した。この時期、インダス川までのインド西側は名

目上はペルシア帝国領であった。

インダス川沿岸の都市タクシラの王アンビがアレクサンドロス軍に友好的であったために、大王はひと月滞在した。このアンビと対立していたのが、ヒュダスペス川（現ジェルム川）沿岸を領するポーロス王であり、アレクサンドロス軍とも対峙した。

前326年5月にパンジャブ東部を領するポーロス王が率いる歩兵5万、騎兵3000、戦象130の大軍とヒュダスペス河畔で戦った。ここでの「戦象」とは、象使いが乗る象で、騎兵の馬を動揺させる効果があった。

その生涯最後の大会戦にアレクサンドロスは勝利すると、さらに東進した。インダス川最後の支流ヒュファシス川（現ベアス川）に到達し、まだ見ぬガンジス川と肥沃な国土に想いをさせたアレクサンドロスだったが、将兵たちはこれ以上の遠征を拒否、反転を余儀なくされた。

とはいえ、2000艘の大船団を編成し、インダス川河口をめざして南下する。やはり途中の諸部族との戦闘で殺戮がくりかえされたが、ようやく前325年夏に河口へたどりついた。その後、過酷なガドロシア・マ克蘭砂漠をふた月で横断、前324年にスーサ、前323年春にバビロンへ到着する。

だが、この地でアラビア半島周航を計画するものの、アレクサンドロスは熱病を発して、6月10日に33歳にひと月足らずという若年で死去した。

遠征軍の行軍のじっさいについては、森谷公俊氏の著作に依拠して、いくらか具体的に紹介したい。

遠征出発時のマケドニア・ギリシア同盟軍は、騎兵や歩兵、先発隊などの総兵力4万7100人に、非戦闘員である従者1万6000人と数百の専門技術者をくわえると、総計約6万4000人である。

非戦闘員には、学者、召使い、商人、捕虜を売買する奴隷商人、娼婦たちがふくまれていた。土木技術などの専門家には、歩幅と歩数で進軍距離を計測して記録する歩測家があった。かれらのなかには、『アジア歷程』、『アレクサンドロス征旅歷程』を残して、後世に東方遠征の記録を伝えた者もいた。

アレクサンドロスの東征が開始されてから最初の4年間は、いわばペルシア王国が征服した地域の解放戦争という性質があった。エジプトやバビロニアでは、かれは解放者として歓迎された。だが、それ以降ペルシア帝国内の中心へと進撃していくと、その住民たちはマケドニア兵に敵対的で、占領後も抵抗が継続することも少なくない。当然ながら、敵

地での略奪によって糧^{りようま}秣^つを確保するしかない。現地住民の襲撃でマケドニア兵が殺害される事例もあった。

未知の地域へ進攻するためには、その地の情報が不可欠である。旅先の情報が必要なのは、現代の旅とかわらない。地元住民や帰属した貴族たちが地形、気候、交通路、物資などを知らするための情報源となった。そのさいには、通訳や案内人が重宝されたはずである。

アレクサンドロス軍の人馬が橋のない大河をわたるときは、どうしただろうか。紀元前331年の夏にユーフラテス川を渡河^としたときは、舟を並べてつないだうえに板を置いて橋とする舟橋^{ふなばし}（浮き橋）をつくって、幅700メートルの川をわたった。舟橋は古代の中国や日本の記録にも残る、洋の東西を問わず古代から用いられてきた渡河手段である。

前329年にオクソス川（現アムダリヤ川）をわたるさいには、浮袋をつくって渡河している。野営用の革製テントに枯草などの詰めものをして、固く縛り、縫い合わせたものである。兵士たちは皮の浮袋に腹ばいのままで川幅約1キロを泳いだ。全軍の渡河に5日を要した。

同年、対岸にスキタイ人騎兵が待ち受けるヤクサルテス川（現シルダリヤ川）のばあいは、騎兵と歩兵を運搬するための筏1万2000艘を3日間で急造した。筏にはスキタイ

人の攻撃から漕ぎ手を守るための武装兵が配置されており、軽装兵が筏の後方を革袋で泳いだのである。

これらの事例が示すのは、古代の軍隊の遠征とはいえ、さまざまな非戦闘員が活躍していることだ。旅程の計測・記録、食糧調達、移動手段の確保など、直接の戦闘以外の多様な生業なりわいともいうべきもののほうが、旅行にとつてはいかに不可欠であるかを教えてくれる。くわえて、足を踏み入れたことのない世界の情報を事前に入手しておく必要性も同様である。遠征は戦闘員だけでは成立しないのだ。

ところで、アレクサンドロスの東方遠征のほんとうの動機を求めることは困難なようである。挑戦し、勝利しようとする自己実現こそを、大王はつねに求めている、かれに追隨した将兵たちも同様の価値観をもっていたと考えられる。あるいは、大王自身が軍事的征服者である一方で、未知なるものへの強烈的な憧憬と好奇心を有する探検家であったともみなせよう。

次節では、アレクサンドロスからおよそ900年後に、かれと同様に天竺（インド）をめざして、しかしながら、大王とは正反対に西から東へと陸路を旅した中国人僧侶の旅に着目してみよう。すなわち唐時代の高僧、玄奘三蔵である。

三藏法師の天竺行

河南省陳留県に生まれた玄奘（602・664）は、幼少時より聡明の誉れ高く、13歳で出家し、洛陽の浄土寺の僧となった。中国四大奇書のひとつ、小説『西遊記』の主人公のモデルとなった実在の人物である。

玄奘が生まれた602年という時期は、日本では聖徳太子の治世であった。玄奘の生年の翌603年は冠位十二階制定、その翌604年は十七条憲法制定といった時代である。また、アラビア半島のメッカ郊外の岩山の洞窟にこもって、のちにイスラーム教を創始する30歳くらいのムハンマド（570ごろ・632）が瞑想していた時期でもある。

現在、三藏法師といえ、あたかも玄奘個人を指す俗称として使用されている。だが、じつは經典を蔵にたとえ、きょうぞう経蔵、りつぞう律蔵、ろんぞう論蔵の3種すべてに精通した高僧に対する敬称である。それにもかかわらず、玄奘の固有名詞のように使われるようになったのは、『西遊記』の普及とともに、かれが不世出の仏教僧であったからなのだ。

隋朝末期の戦乱を避けるために、最初は長安に、つぎに成都へ居を移した。622年に成都で受戒したのちも、遊学をつづけ、中国各地の名僧のもとで教えを乞うた。その後、長安に戻り、大乘仏教を学んでいた玄奘が天竺をめざして旅立ったのは629年（627年と

も8月のことである。単身での不法出国であった。

旅立ちの理由は、中国の仏典は中国人が訳したものではなく、しかも異説も多いために、真正の内容が詳らかでないからである。それゆえ、玄奘はみずから仏教発祥の地インドで原典を学び、自身で翻訳したいと望んだのだった。

玄奘が進んだルートは、現代では「シルクロード」として知られている。この語と概念を、19世紀後半にドイツの地理学者フェルディナント・フォン・リヒトホーフエン（1833-1905）が「絹の道」（Seidenstraße）として使用したのが最初である。前田耕作氏によると、現在では「アジアを東西に横断・貫通して東方アジアと西方地中海世界とを繋ぐ国際的な交通・交易の道の総称」にして、「この交通・交易路を通じておこなわれた東西文化交流のすべてを包摂する普遍的な文化用語」となっている。

当然ながら、現代でも困難な陸路を西進する玄奘の旅は熾烈をきわめた。たとえばその伝記『大慈恩寺三蔵法師伝』^{だいじおんじ}には、雪と氷に覆われた天山^{てんしゃん}山脈で同行者10数人が凍死し、多くの牛馬を失ったという記事がみられる。幾度となく盗賊に襲われながら、パミール高原を越えて、インド中部のマガダ国の大寺院であるナーランダー僧院にたどりついたのが632年といわれている。3年におよぶ往路だった。

玄奘の記録によると、629年に滞在したバーミヤン王国には3体の巨大な大仏があったとされる。20世紀に確認されていたのは、全長38メートルの東大仏と55メートルの西大仏である。しかし、この2体が2001年3月にイスラーム主義組織タリバーンによって爆破されたことはまだ記憶に新しい(図1・4)。

ところで、アレクサンドロスが東征途上でおとずれた土地と玄奘の滞在地は、インドやその周辺で重なることも少なくないようだ。現ウズベキスタン東南部のブズガラハナ谷には、玄奘が「鉄門」と記す哨所しやうしよがあったことを示す遺構が残っている。『アレクサンドロス大王伝』には、ソグディアナの英雄と戦ったときに、アレクサンドロスがこの谷を通過したという記述があり、それが「鉄門」だと考えられている。

ほかにも、玄奘はパキスタン北部のインダス川東岸の町タクシラにも滞在した。かれが滞在した時代から90

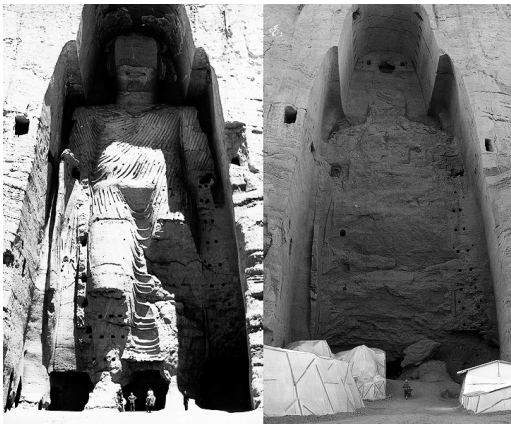


図 1-4 バーミヤンの石仏(左)と破壊後(右)

0年ほど以前に、友好的なタクシラ王の歓迎を受けて、アレクサンドロスがひと月滞在した町である。

古代からシルクロードは存在しており、唐の長安からインドを経由して、アレクサンドロスの故郷マケドニアがある地中海世界までつながっていたといえよう。

天竺での仏教研究という念願がかなった玄奘は、数千人の学僧がいたとされるナーランダー僧院の戒賢けいけん（529・645）のもとで5年ほど大乘仏教を学ぶ一方で（図1・5）、インド各地に残る仏跡を求めて巡礼した（かれがじつさいに旅したかということは疑問視されている）。

多くの仏典や仏像をともなつて、玄奘が帰国の途についたのは638年とされている。往路とは異なるルートをとって、ヒンドウクシュ山脈を越えて、

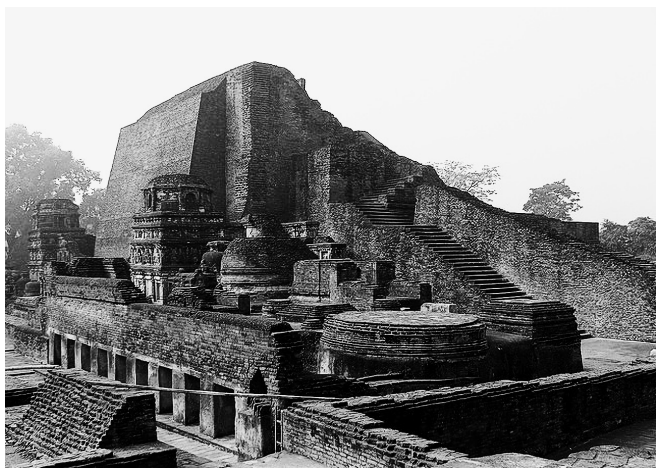


図 1-5 玄奘が学んだナーランダー僧院の遺跡

タクラマカン砂漠の南方を東へと進んだ。往路と同様に、苦難にみちた旅程だった。クスタナ国で唐の太宗からたいそう帰国の勅許を得て、645年に玄奘は運河を舟で航行して、長安へ帰還した。27歳で旅立った三蔵法師は40代前半になっていた。

17年におよぶ天竺往来の旅を終えた玄奘がもち帰ったのは、仏舍利150粒、仏像7体、657部の經典だった。

玄奘の旅の目的は、大乘仏教の經典を取りにくくことにくわえて、インドでの大乘仏教研究だった。現代であれば、「留学」といえるものである。帰国してから、かれはその留学の成果を問おうとした。すなわち、もち帰った經典の翻訳事業に取りかかったのである。17年6ヵ月の作業期間を経て翻訳された仏典は、75部1335巻という大偉業であった。日本に伝わった『般若心経』も玄奘が訳したものだといわれている。

仏典翻訳のかたわら、玄奘はその遠大な天竺行の記録『大唐西域記』を残している。西域とインドの見聞を玄奘が弟子に口述筆記させた地誌的性格が強い旅行記で、全12巻で646年に完成した。

『大唐西域記』の記述は広範囲かつ正確ゆえに、中央アジアやインドの考古学調査には近代でも欠かせない記録であった。19世紀末や20世紀初頭にニヤ遺跡や敦煌を探検調査した

考古学者オーレル・スタイン（1862・1943）はその英訳本を携行していた。

玄奘の旅そのものの詳細が記されているのは、のちに弟子の慧立えりゆうと彦惊げんそうが書いた伝記『大慈恩寺三藏法師伝』全10巻の前半5巻分である。

玄奘の天竺行と生涯を考えると、傑出した実行力とともに、かれ特有のいくつかの性質がみいだされる。

ひとつは仏教学者としての情熱と探究心である。天竺への旅に出る以前からすでに学僧としての名声は確立されていたにもかかわらず、大乘仏教の原典を渴望し、また教義を探究するために、インドまで留学したのである。帰国後の精力的な仏典翻訳作業もふくめて、そのあくなき探究心は類たぐいまれなものだと思われる。

さらには、優秀な情報収集力があげられる。『大唐西域記』に収録されているのは、当時存在した100以上の国についての情報である。玄奘が旅先の国の情報を入念に収集していたことは、その地誌的情報が基本的に正確だったゆえに確認されている。事前に目的地の情報を得ることで、旅の危険を最小限に抑制しようと意図していたはずである。

最後は交渉力である。玄奘は旅で通過する国の最高権力者たちと面会し、協力を取りつけて、経済的・人的支援を得ることに成功していた事例が多く見受けられる。もちろん、

僧としての学識や人格が秀逸だったこともあるだろうが、進む先々の地をおさめる権力者たちの庇護を獲得し、従者や牛馬を随行させてもらい、たいていはキャラバンを組んで、天険の地を踏破したのである。

つまるところ、玄奘の17年にわたる西域への旅は、これらの卓越した才能なしでは完遂できないものだったといえよう。

古代の「観光名所」、世界の七不思議

玄奘がバーミヤン王国に滞在したおりに3体の巨大な大仏をみたのは、前述のとおりである。岩山に彫塑された38メートルと55メートルの大仏2体はまさしく驚異の建造物であって、玄奘を驚嘆させた。

これとおなじく、地中海沿岸地域・オリエントの古代都市にも、巨大な建造物で知られる「観光名所」は存在した。いわゆる「世界の七不思議」である。このばあいの「不思議」とは、英語「ワンダー」が意味する「驚異をあたえるもの」、すなわち「驚異をあたえる建造物」をいう。

紀元前5世紀、ギリシアの歴史家ヘロドトス（生没年不詳）が最初に「世界の七不思議」と

いうことばを使つたとされている。そののち、紀元前225年にビザンティウムの数学者フィロン（紀元前260・前180）、紀元前130年ごろにシドンの詩人アンティパトロス（紀元前2世紀後半・前1世紀初頭）も「世界の七不思議」を出している。

時代や記録によつて異同はあるものの、中世までは一般的に以下の7都市の巨大建造物を指した。これらの「七不思議」はそれぞれ、キリスト教やイスラーム教が台頭する以前の古代の土着信仰によつて建造されたものばかりである（図1・6）。

ギザの大ピラミッド（エジプト）

バビロンの空中庭園（イラク）

エフェソスのアルテミス神殿（トルコ）

オリンピアのゼウス像（ギリシア）

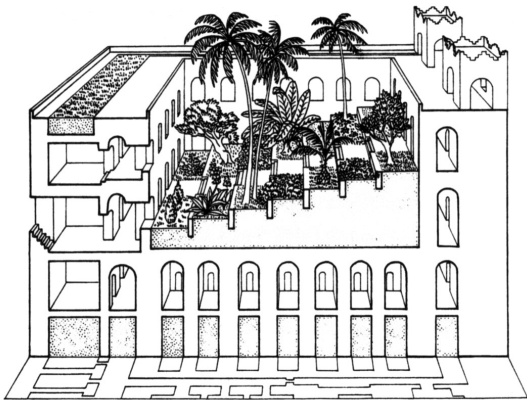


図 1-6 ひな壇式だったといわれるバビロンの空中庭園

ハリカルナッソスのマウソロス霊廟（トルコ）

ロードス島ロードスのヘリオス巨像（ギリシア）

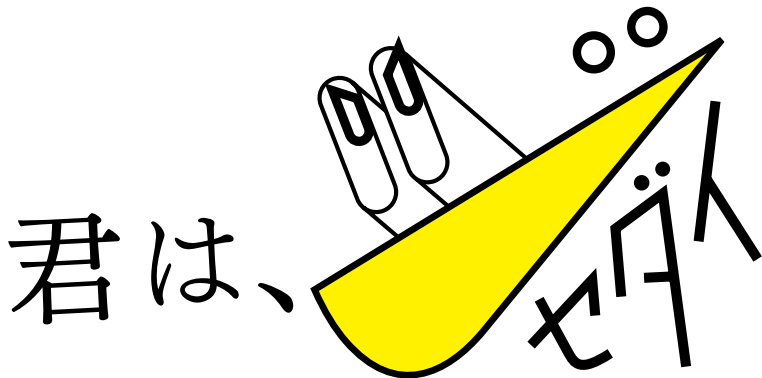
アレクサンドリアの大灯台（エジプト）

これらのうちで現存しているのは、エジプトのギザの大ピラミッドのみであって、ほかは伝承や廃墟のみが伝わっているだけである。

この大ピラミッドは、第4王朝2代目のクフ王のためにつくられたもので、4000年のあいだ、世界最高を誇る建築物であった。データだけでも、その異様さがよくわかる。

完成時の高さは146メートル、重量500万トン以上とされ、積み上げられた石材の数は200万個以上、建造地の面積5・15ヘクタールはテニスコート200面相当と、なにもかもが規格外のスケールである。その比類なさは、現代のエジプトでも最大の観光資源となっている。

このピラミッドに代表されるように、人びとは古代からずっと巨大建築物や巨像をみては圧倒されてきた。ただ存在するだけで人間を驚嘆させる巨大なモノたちは、非日常的な風景の最たるもののなのである。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!